

## ■所感

# この1年を振り返って

日本風力発電協会 専務理事 中村 成人



### はじめに

昨年6月に専務理事に選任頂いてから1年が経過しましたが、文字通りあつと言う間の1年でした。その間風力発電を取り巻く環境は激しく且つ大きく変化しました。

自分の反省を含めてこの1年を振り返り、次の1年に向けた自分なりの行動の基本としたいと思います。

### 《全体を見通す目》

協会が日常的に参加している政府の審議会は、経産省関係だけでも下記の4つがあります。下記の内、上の3つは省エネ・新エネ部が、また4つ目は電力・ガス事業部が事務局となっています。

- 1) 新エネルギー小委員会
- 2) 系統WG
- 3) 買取り制度運用WG
- 4) 制度設計WG

これらの審議会の場における議論が、直接的・間接的にも日本の将来の形を決めることになる電力システム改革やエネルギーミックス(電源構成)の方向性を決定していくことになります。

今般決定をみた2030年のエネルギーミックスにおいて風力発電に関しては残念な結果となってしまいましたが、風力発電を始めとする再生可能エネルギーが、国の電源構成の中で始めて重要な位置づけを獲得したことは非常に大きな意味があると考えています。また、この事実は今後とも高まりこそすれ、逆行することはありません。これはあり得ないことであるとも認識しています。

風力発電業界を代表する立場にある協会としても、その責任の重要性を再認識した上で、電力に限らず日本のエネルギー政策全体を俯瞰できるような目を更に養い、対外的にも分かり易くまた説得力のある一貫した意見を発信していけるように、一層の努力を傾けたいと考えています。

### 《見せ方の技術(知恵)》

他人に自らの意見を訴え、理解と協力を得る

ためには、それなりの努力に加えてある意味で技術(知恵)が必要であるとも、改めて感じた1年でもありました。

意見や見解は正当であり合理性があることが求められることは言うまでもありません。しかしながら、例えば再生可能エネルギーに関する事柄についても、実に多くのステークホルダー(利害関係人)がおり、立場ごとに様々な異なる意見を持っています。

協会としても、しっかりとした根拠に基づく自らの意見と見解を持つと同時に、決して独りよがりになることなく、立場を異にする人々にも一定の理解を得ていく必要があります。そのためには自分の理論の補強に止まらず、相手方の理解を得易くするような話の仕方や、資料の作り方(論理の組立)に工夫も必要ですし、同時にどのような場や手段を活用して訴えかけていくかという、戦術も重要だと実感しました。

以上のような色々な面を一括りにして、敢えて「見せ方の技術(知恵)」と表現しましたが、今後はこういう面にも気を配って行きたいと思っています。

### 《スピード感ある活動》

冒頭にも述べましたが、現在我々を取り巻く環境は大変早いスピードで、大きく変わりつつあります。熟慮は必要ですが、時機を失することなく必要な行動を起こさずして、期待する結果を残すことが難しいのも事実であると思います。そのためにも、代表理事・副代表理事を始め理事各位のご指導も得て、先ずは協会自らが進むべき方向性と具体的な方策を、打ち出すようにしたいと考えています。

これを定めることが出来れば、政策決定のスピードにも遅れることなく、積極的・能動的な協会の活動が可能になるものと考えています。

理事各位を始め、会員各位のご指導とご協力をお願い申し上げます。